

創業100年を迎える モリタグループの軌跡

第1回：森田歯科商店の創業と「四恩の精神」

モリタグループは2016年に創業100年の大きな節目を迎えることになりましたが、編集部より「創業100年を迎えるモリタグループの軌跡」として、企業の生い立ちを紹介してほしい旨の依頼がありました。日本の歯科界に長く携わる企業グループとして、今日に至るまでの歴史を広く知っていただくのも意義のあることと考え、創業以来の資料を元に5回に分けて綴ることとしました。

森田晴夫

(株式会社モリタ代表取締役社長)

● 森田純一、京都に森田歯科商店を創業

モリタの歩みは1916（大正5）年、大澤商会の常務取締役であった森田純一が歯科器械・材料の輸入販売事業を行うため、京都市中京区麩屋町通三条下ルの自宅での「森田歯科商店」創業に始まります。

1883（明治16）年1月、現在の滋賀県草津市で地方役人の家に生まれた純一は、地元の有力な実業家梶原伊三郎氏の勧めで東京の私学「慶應義塾」に進学しました。しかし、1900（明治33）年、純一が18歳になろうかという時、後援者の梶原氏と実母が相次いで亡くなったため、勉学の道を断念して京都の大澤商会に入社しました。当時、手広く海外と取り引きしていた貿易商の大澤商会で、純一は高級時計や自転車、蓄音機など多様な輸入販売事業の発展に力を尽くしました。そんな折、外国の歯科器械・材料の輸入販売に着目した純一は、大澤商会の常務を兼務しながら森田歯科商店を創業し、同じ大澤商会の社員で才覚と実行力に富む大塚精一を大番頭に登用してその運営を任せました。

● 近代歯科医療の発展とともに

1890年代から1900年代初めにかけてアメリカで近代歯科医療が大いに発展し、現地で学んだ日本人歯科医師らが最新の学問と治療方法を国内に取り入

れ、進んだ歯科器械や材料が盛んに輸入されるようになりました。そのような中、貿易業界に精通していた純一は、森田歯科商店創立後、大澤商会と取引関係にあったアメリカのS.S. ホワイト社やリター社、コーク社、イギリスのアッシュ社などと特約店契約を結び、京都市内の歯科医師のアドバイスを受けながら歯科器械、材料の輸入に着手しました。

当時は第1次世界大戦（1914年～1918年）の最中で、日本の産業界は国産技術の向上に取り組み、急速に発展しつつありました。そのような大戦景気も追い風になって、森田歯科商店の輸入販売事業はすぐに軌道に乗り、創業3年後の1919（大正8）年、麩屋町通二条下ルに洋館建て店舗を開設しました。

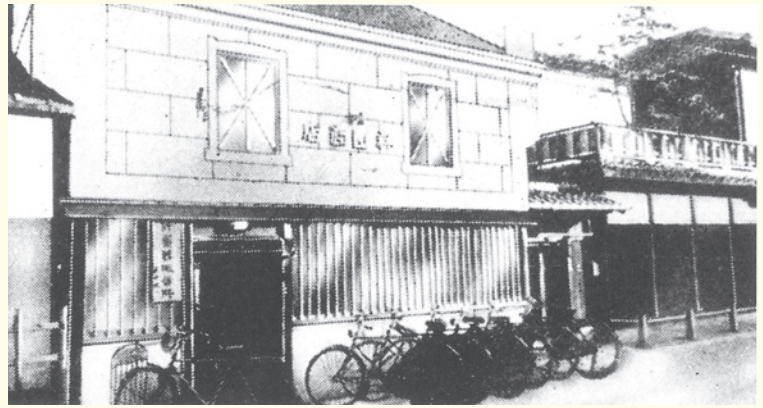
● 東京・大阪・小倉店の開設

1918（大正7）年、純一は事業拡大のため大塚を支配人として派遣して東京店を開設しました。

当初、東京市京橋区小田原町（現 築地）に東京店を開き、翌年（1919年）6月には新肴町（現 銀座3丁目）の新店舗に移りました。そこに末弟の森田五郎が支店長として着任し、東京店の本格的な事業が始まりました。その頃は第1次大戦後の不況期でしたが、木製治療椅子や無昇降椅子などの需要が多く、昇降ポンプ椅子も取り扱っていました。さらに1922（大正11）年、リター社から購入した小児用



創業者 森田純一



創業当時の森田歯科商店 右は自宅

治療椅子を参考に委託製造した製品を販売しました。そして当時の取引慣行ではなかった、仕入先に対して毎月全額現金払いをすることによって各工場の信頼を得ていきました。

前年（1921）年5月、東京店の基盤を整えた大塚は純一の指示で大阪市南区安堂寺橋通1丁目（現南船場1丁目）に大阪店を開設し、支配人に就きました。優良品を幅広くそろえて市場ニーズに応えることを基本方針とした大阪店では大阪市内の開業医すべてに挨拶状を送り、開店と同時に営業スタッフが商品を満載したカバンを自転車に乗せて担当区域を巡回していきました。

当初、大阪店の取扱商品のほとんどは大澤商会や京都本店、東京店を通じて仕入れていました。しかし、それでは利益が少なく厳しい商戦を勝ち抜くのに不十分だと判断した大塚は、第1次大戦によって途絶えていたドイツ商品の輸入再開という好機をとらえ、ドイツのビーバー社製品一切の販売権を獲得して同社製の治療椅子やスピットン、エンジンなどを大量に直接輸入して成功しました。その後、ドイツ製品よりアメリカ製品のほうが優れていることが判明すると、ドイツ製品の取り扱いを停止し、アメリカ製品の仕入れを拡大し優良品の提供の道を選択しました。1923（大正12）年、九州に小倉店（現北九州市小倉区）を開設。創業7年目に、旧制歯科医学専門学校が存在した東京・大阪・九州に足掛かりを作ったのです。

● 「四恩の精神」で歯科医療の発展に貢献

森田歯科商店は創業後、京都をはじめ東京、大阪などで積極的な事業展開を行うとともに、日本の歯科医療発展のための取り組みにも着手しました。実例としては、1920（大正9）年に東京店に森田歯科商店研究部を発足させ、アメリカから帰国した渡辺悌先生*1をはじめとする東京の歯科医師らが中心となって設立された補綴研究会（日本補綴歯科学会のルーツ）を後援するほか、歯科医療に関わる専門情報を掲載したパンフレットを定期刊行。また、大阪店研究部では1929（昭和4）年4月、谷和文平先生*2を編集主幹として、新材料、機器の紹介をはじめ、歯科医療の学術論文や研究成果を掲載する月刊学術雑誌『臨牀歯科』を発刊しました。

このように森田歯科商店の創業以来、モリタが歯科業界と歯科医療発展のために多様な事業を展開してきた原動力が「四恩（シオン）の精神」です。四恩とは、天地、国家、父母、衆生の四つの恩を意味し、「日常より恩を思い、感謝の気持ちを持って良心的な商いをせよ」という創業者・森田純一の遺訓によるものです。この「四恩の精神」は創業以来受け継がれ、すべての活動のバックボーンとなり、モリタのDNAともいえるものです。

*1 渡辺 悌（やすし）先生：大阪大学歯学部附属病院初代病院長。東京歯科大学大学院初代研究科長。

*2 谷和文平先生：大阪歯科医学専門学校の補綴学や矯正学の講師を担当。谷和式鑄造器など発明が多かった。